

所報

No.122
平成29年6月15日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)
URL:http://center.tym.ed.jp/

目次

- 巻頭言 1
- 今年度の研修事業より 2
- 調査研究事業の概要 3
- 特別寄稿(徳橋客員教授) 4
- 第34回高等学校生徒海外派遣事業帰国報告... 4
- 研修顧問・学力向上アドバイザー・客員教授の紹介... 5
- キャリア教育指導者養成研修、随想... 5
- 連載「知って得29」 6

巻頭言



学校では、若い先生が増え、職員室の雰囲気を変化しているように思います。若い先生方の頑張りには頭が下がります。教職経験は浅いながらも、授業や校務に真面目に取り組んでおられ、頼もしく思っています。このように若い先生が輝いているのは、周りの先生方が忙しい中、先輩として、同僚として、若い先生方を優しく見守り、助け、支えておられるからだろうと思っています。ただ、若い先生方が、授業や分掌の業務、部活動指導等で、忙しく飛び回っておられる姿を見ると、授業等の準備や研究する時間が確保できているのだろうかかと心配になることもあります。

最近では、ベテラン教員の大量退職が見込まれる中、毎年300名以上の教員が採用されています。職場の年齢構成はいびつで、優れた教育理念や指導技術の継承、中堅教員の育成等、様々な課題があります。このような状況のもと、センターでは研修の改善や充実に努めてきており、今年度より2年次教員と11年次教員との「年次交流研修」を実施することになりました。この研修の学びが校内におけるOJTの充実につながることを願っています。

ところで、先日、「教えるということ」という本を読みました。昭和45年の富山県小学校新規採用教員研修会

研修の大切さ

所長 麦谷 直人

での大村はまさんの講演を収録した本で、若い頃に読んだ記憶があります。いま読んでみて、いろいろ反省したり考えたりしました。たとえば、しっかり子供に教えていますかという問いかけがあります。国語の読むことの学習で、最初の子供の読みを見ないで、どうして教えることができるのか。黙読で速く読めなければ、情報化時代を子供が生き抜けますか。家庭の問題かもしれないが、しっかりと黙読できるように、子供の様子を観察し直さなければならない。また「子供と同じ世界にいない先生は『先生』としては失格だ」とあります。子供は身の程知らずに伸びたい人であり、勉強する苦しみと喜びの中を生きているから、伸びたいという気持ちをもって研究や研修している先生だけが、子供と同じ世界にすることができる。高校で商業科の教員として、地域を支える職業人の育成を目指し指導に当たってきたつもりでしたが、生徒の成長を願い本当に教えていたのか、向上心をもって取り組んできたと言えるのか、反省しています。

昨年12月の中央教育審議会答申には、学習指導要領の理念を実現するための条件整備の一つとして、教員の資質・能力の向上、学校組織全体としての指導力の向上の大切さが謳われていますが、これからも研究と修養に努めていきたいと考えています。

平成29年度初任者研修会・新規採用教職員研修会より



講義「教育公務員としての心構え」



講義「マナーアップ講座で魅力づくり」



講義「教員としての心構え」

- News -

教育資料室をご利用ください。

豊富な教育資料をとりそろえています。目的に応じた資料の検索、閲覧及び貸出をしています。相談にも応じます。

お問合せは (TEL 076-444-6169) まで。 利用時間 平日/8:30~17:00



今年度の研修事業より

✎ 教育研修部

若手教員研修(初任者研修会)・新規採用教職員研修会

4月5日(県立学校)・13日(小・中学校)・20日(学校栄養職員)の開講式を皮切りに、今年度も標記の研修会がスタートしました。当日は、開講式後、「教職員としての自覚と使命1」を実施しました。

4月27日には、全校種での共通研修、「教職員としての自覚と使命2」が実施され、接遇の仕方や情報モラルについて学びました。



情報モラル



教職員としての自覚と使命1

○今後は次のような研修を行っていきます。



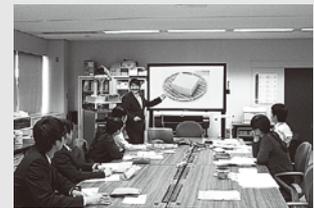
宿泊研修(野外活動より)



学習指導



水泳指導



情報教育

🔬 科学情報部

若手教員研修(理科実験・観察の指導1,2)

「理科実験・観察の指導1,2」は小学校の若手教員(初任者及び2年次の教員)を対象に、観察や実験を進めていくために必要な基礎的・基本的な内容の研修で、先生方の理科指導力の向上を図ることで、実験・観察への不安を軽減し、児童と共に理科を学ぶ意欲が高まるような研修を心がけています。

初任者が受講する「理科実験・観察の指導1」では、エネルギー・物質分野を研修し、2年次教員が受講する「理科実験・観察の指導2」では、生命・地球分野を研修します。研修内容やテキストは、学校現場での指導にすぐに役立つよう、「実験・観察の安全管理」や「学習指導要領と対応した実験・観察」に重点を置いて企画・実施しています。

児童や先生方に、理科が「分かる」「楽しい」教科となるよう支援していきたいと思ひます。



理科実験・観察の指導2
(生命分野:顕微鏡の取扱い)

<参考・問い合わせ> ●デジタル理科室: <http://digirika.el.tym.ed.jp/> ●理科の質問箱: rika-q@tym.ed.jp

♡ 教育相談部

学校支援訪問研修(集団づくりプログラム)

学校支援訪問研修として、平成26~28年度の調査研究の成果を生かした集団づくりプログラム研修を実施しています。プログラムで体験可能な約150のゲームの中から、短時間で実施できるゲームを紹介します。

○あとだしジャンケン

先生や児童生徒の中でリーダーをきめ、リーダーの「あとだしジャンケン、ジャンケンポン」のかけ声で出した手に続けて、「ポン」のかけ声で、みんなはリーダーとジャンケンします。あいこ、勝ち、負けの条件で楽しめます。

○ひたすらジャンケン

制限時間内にできるだけたくさんの相手とジャンケンを繰り返します。何人に勝ったかを数えます。自分が関わろうとしなくても相手から関わってくるジャンケンです。あいこになった相手を数えるルールでもできます。

○ラッキー7(セブン)ジャンケン

ペアの指の数の合計が7になるようにするジャンケンです。7になったら、「ラッキー」と声を出していっしょにポーズをとります。3人、4人でも行なうことができます。「ひたすらラッキー7ジャンケン」にも発展できます。

○鏡になる

ペアで鏡になる人を決めます。鏡の役は、向き合った相手の動きを真似ます。役を交代しながら何度も繰り返します。



※どのゲームも、うまくいかないことでも楽しめる雰囲気になるよう心がけると効果的です。対人関係ゲームは、繰り返して実施したり、他のゲームと組み合わせて実施したりすることができます。対人関係ゲームを用いた集団づくりプログラムの研修についてのお問い合わせは、「教育相談部子ども育成」まで。(TEL:076-444-6166)

調査研究事業の概要

平成30年2月23日(金)に研究発表会を開催し、研究成果を発表します。

✎ 教育研修部

教員の授業における指導力向上に関する調査研究（2年次） — 校内研修の視点から —

学校を取り巻く課題が多様化・複雑化する中で、教員の資質・能力の向上が一層求められています。中でも業務の中核を占める授業における指導力については、各学校で校内研修等によって向上が図られています。教育研修部では平成20年度から校内研修活性化研修会を実施しており、授業リフレクションの手法等を取り入れた校内研修の実施支援に取り組んでいます。

本研究では、1年次の成果・課題を基に、授業リフレクションの手法等を取り入れた研究協力校（小学校2校）仕様の校内研修プログラムを作成します。そして、それに基づいて行われる授業研究の授業における指導力向上への効果を研究協力校仕様の授業チェックシートや追跡調査等により検証します。

調査研究で得られた成果は、校内研修活性化研修会や各学校の校内研修の工夫・改善につなげていきます。



🔬 科学情報部

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習の在り方に関する調査研究（2年次） — ICT活用による授業の支援 —

平成28年12月に発表された新学習指導要領に関する答申では、「どのように学ぶか」に対し「主体的・対話的で深い学び」をキーワードとして取り上げ、その実現のためにアクティブ・ラーニングの視点から授業の改善を求めています。また、日常的なICT活用も求めていることが伺えます。

さて、平成28年度の本研究においてはグループ学習を取り入れた授業の問題点を調査し、その問題点を解決するために、提案1「グループ学習成立のために大切なこと」及び、提案1に有効なICT活用方法として、提案2「ICT活用によるグループ学習のポイントとその対策」を作成しました。また、提案1、2を取り入れた授業を社会科、理科、美術科、技術・家庭科の4教科で行い、授業実践事例を作成することができました。

今年度は、平成28年度に作成した提案1、2をさらに活用しやすいものに修正し、これらを取り入れた授業実践事例を国語、数学、英語、保健体育で作成します。また、この研究成果を、日頃の先生方の授業に役立つように発信していきます。



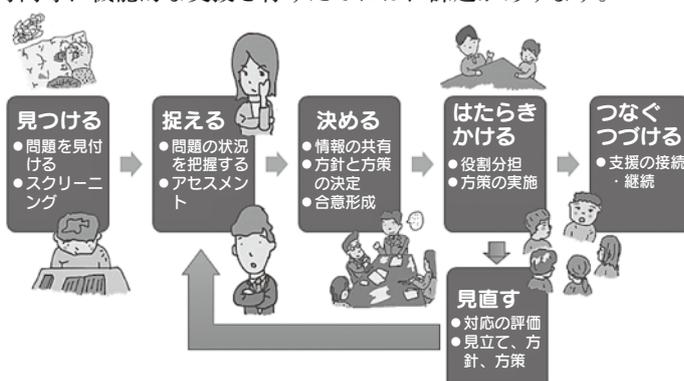
♡ 教育相談部

児童生徒へのチームによる支援の在り方に関する調査研究 — 担任が指導に困難を感じている児童生徒への支援体制づくり —

チームによる支援とは、困難な状況にある児童生徒について、複数の教職員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等がチームを編成して、児童生徒や家庭への支援を行い、問題解決に取り組むことです。児童生徒の問題行動等の背景には、児童生徒を取り巻く様々な環境や要因が影響を及ぼしています。学校現場では、問題を早期に見出し、情報を共有し、状況の把握や支援方針の検討、役割分担する具体的な支援、そして、支援後の対応の見直しを通して問題解決に向かう、協働的なチームによる支援が有効だと考えられます。しかし、早期発見や対応、児童生徒理解と情報の共有、合意形成のための手順やそれらに要する時間等、機能的な支援を行うためには、課題があります。

そこで本研究では、気になる児童生徒の困難な状況を把握するためのスクリーニングシートやアセスメントシート、ケース会議を効果的に進めるためのシート等で構成された「チーム支援シート」を用いたチームによる支援の仕組みのモデルを開発することとしました。援助資源を十分に生かし、できるだけ短い時間で効果的な取組を行うことや、児童生徒自身の困難や心情に寄り添った対応ができるよう、研究協力校での実践を基に、分かりやすく使いやすいモデルづくりに取り組めます。

開発したモデルは、学校支援訪問研修等を通して、学校現場の支援に生かしていきたいと考えています。



チームによる支援のモデルのイメージ

何を評価すればいいのか

客員教授 徳橋 曜



大学の西洋史の講義の最初には、歴史学につきまとう主観性や史実と事実の相違について話します。学生は正解を求めることに慣れていますが、現場の先生たちが考えさせる授業を工夫しても、試験では正解が要求されるからです。しかし本来、歴史学にただ一つの「正解」は存在しません。大学入試に至る試験で「正解」とされるのは、教科書に載っている定説であり、基礎知識としてそれを覚えたかどうかを問うているのです。定説とは、現時点で実証された過去の像として妥当と認められたもので、解釈や時代や史料によって変わる可能性があります。歴史像の客観性は、大多数の人々に共有される限りで担保されているのです。「本当は～だった」と謳う歴史関係の記事や本がありますが、それも既存の見方と違うだけのこと。ではなぜ歴史教育で「正解」を問うのかと言えば、過去をどう捉えるかは現在への理解につなが

り、現在の世界に対する理解が共有されなければ、協調や平和も難しい、という思いがあるからです。歴史教育における評価とは、共有されている（されるべき）歴史像の理解度を評価しているのです。そして、それを踏まえて大学では、「正解」のない歴史学の営みに触れてもらい、基礎知識の理解と歴史解釈の思考を評価します。さて、来年度から小学校で、再来年度からは中学校でも道徳が教科化されます。歴史以上に、道徳の絶対的「正解」を定めることは困難です。時代、信条、地域、宗教、立場等の違いによって道徳観も異なるからです。道徳の基準やその曖昧さを考えさせるのも立派な道徳教育だと思いますが、どうやって評価し、成績をつけるのでしょうか。道徳教育の大切さは否定しませんが、「道徳」や「常識」、「社会規範」とされるものが、当該社会の在り方に影響されると同時にその社会の人々をしばしば無自覚に従わせ、行動を規定することを社会史研究は明らかにしてきました。歴史学者としては、教科化された道徳教育が、成績評価を通じて生徒を「正解」に縛りつけるようにならないことを祈ります。

り、現在の世界に対する理解が共有されなければ、協調や平和も難しい、という思いがあるからです。歴史教育における評価とは、共有されている（されるべき）歴史像の理解度を評価しているのです。そして、それを踏まえて大学では、「正解」のない歴史学の営みに触れてもらい、基礎知識の理解と歴史解釈の思考を評価します。

さて、来年度から小学校で、再来年度からは中学校でも道徳が教科化されます。歴史以上に、道徳の絶対的「正解」を定めることは困難です。時代、信条、地域、宗教、立場等の違いによって道徳観も異なるからです。道徳の基準やその曖昧さを考えさせるのも立派な道徳教育だと思いますが、どうやって評価し、成績をつけるのでしょうか。道徳教育の大切さは否定しませんが、「道徳」や「常識」、「社会規範」とされるものが、当該社会の在り方に影響されると同時にその社会の人々をしばしば無自覚に従わせ、行動を規定することを社会史研究は明らかにしてきました。歴史学者としては、教科化された道徳教育が、成績評価を通じて生徒を「正解」に縛りつけるようにならないことを祈ります。

第34回 富山県高等学校生徒海外派遣事業帰国報告

企画調整部企画課 研究主事 広瀬 正宜

平成29年3月6日(月)から3月17日(金)までの12日間、台湾、シンガポール、マレーシアを訪問しました。「富山県と台湾、シンガポール、マレーシア～これからの国際交流と環境問題～」をテーマに19名が参加しました。

1 環境問題への取組

マレーシアの日本国大使館で、マレーシアの国事情、環境問題について説明を受けました。ごみの分別収集、不法投棄防止や近隣国の焼き畑農法で生じるヘイズ(煙霧)による煙害への対策・取組について話を聞きました。シンガポールでは、ニューウォータービジターセンターを見学しました。水資源が乏しく下水処理水を再利用するため飲料水レベルまできれいに浄化する施設であり、その浄化された水を「NEWater」と呼んでいます。浄化設備として日本企業の逆浸透膜、ろ過膜が利用されており日本の技術レベルの高さを実感しました。台湾は、ごみの分別収集が定着しており、学校でもごみの種類別にゴミ箱が用意されていました。



ニューウォータービジターセンター (シンガポール)

2 国際交流

高校、大学各二校を訪問し、授業への参加、グループディスカッションを通して同年代の人たちとの交流を深めることができました。台湾の内湖高級中学では、二泊三日のホームステイを実施し、団員は生活、文化、価値観の違いを直に感じる事ができたようです。

どの訪問先でも温かく迎えていただき、団員はたいへん感激していました。団員は、始め緊張と自分の英語力が不安なため控えめでしたが、次第に積極的にコミュニケーションを図るようになり様々な経験から多くのことを感じ、自分なりに考え多面的に物事を捉えることができるようになりました。



ラワン高校 (マレーシア)

3 派遣団員の言葉から

- 現地の学生と英語で意見交換できたことが自分を成長させるきっかけになったと思います。
- 日本とは違った海外の環境に対する取り組みを知ることで環境問題を世界という規模で見ることができるようになりました。
- 宗教、文化、民族が違っていても偏見をもつのではなく、コミュニケーションを図ることでお互いを認め合うことが大切だと思いました。

研修顧問・学力向上アドバイザー・ 客員教授の紹介

今年度は研修顧問と学力向上アドバイザーそれぞれ1名と、富山大学人間発達科学部から4名の客員教授が着任されました。

研修や調査研究事業等において助言をいただくことになっています。

山崎 弘一 研修顧問

吉江 友秋 学力向上アドバイザー

徳橋 曜 客員教授
(代表、企画調整部)

増田 美奈 客員准教授 (教育研修部)

片岡 弘 客員教授 (科学情報部)

小林 真 客員教授 (教育相談部)

「キャリア教育指導者養成研修」が 富山県で実施されます

独立行政法人教職員支援機構と富山県教育委員会が主催する「キャリア教育指導者養成研修」が、8月28日及び10月23日からそれぞれ5日間、パレプラン高志会館で開催されることとなりました。

全国から集まるキャリア教育を担当する指導主事等に対し、発達段階に応じたキャリア教育の在り方、推進のための手立て、評価・改善方策について等を習得してもらい、研修のマネジメントを推進する指導者の養成を図ることを目的としています。

東京一極集中を是正する観点から検討が行われてきた、政府関係機関（研究機関・研修機関等）の地方への移転に関して、富山県が全国の教員にとって参考となる取組を有している等の理由から実施となりました。今年度は本県の事例発表を小中高それぞれに行うことも決まっています。総合教育センターは、県教育委員会と連携を図りながら、中心となって運営を行います。



随想

「ものづくり」

教育研修部長 櫻野 克也

1578年創業の世界最古の企業である大阪の建設会社「金剛組」（現在は子会社化）、1586年創業の日本国内の上場企業では最も歴史の古い松井建設（加賀藩第2代藩主前田利長の命を受け、越中守山城を普請）等、我が国は老舗企業が多い。こうした歴史ある企業は、ものづくりの伝統技術・技能をしっかりと引き継いでいる。「ものづくり」とは、我が国の技術・技能や精神性、歴史を反映させたものをつくることであり、海外から入ってきた技術・技能だけでなく、日本の伝統技術・技能の延長上に現代の製造業がある、という認識で使われている言葉である。

私はこれまで、「ものづくりは人づくり、人づくりは心づくり」という言葉をよく耳にしてきた。一流の製品をつくるためには、一流の人材を育てることが大切であり、また、技術は人によって伝えられるものである。すなわち、「ものづくり」は「人づくり」から始まる。

「構想」を形にするのは「人」、「人」が「もの」をつくり、「もの」が「人」を考えさせ、成長させる。「もの」を自分の構想したとおりに加工するとき、設計どおりの表面精度や寸法精度が出ない場合も多く、その原因を究明し、その材料の性質に合わせて加工方法・条件等を柔軟に変え、試行錯誤を重ねる。そうすることで、様々な課題に対しても、まず

「自分に原因があるかもしれない」という謙虚さをもつようになる。「ものづくり」を通じた経験が「心」を育て、「心」のこもった製品がユーザーを満足させ、さらなる期待やニーズが生まれてくる。すると「技」も必然的に育つ。こうして「人のもつ心」と「人が生み出す技」は進化を遂げるのである。

我が国は、海外の技術・技能を柔軟に取り入れ、高度に応用しながら、ものづくりを核として戦後の経済成長を遂げ、ものづくり大国と言われてきた。ここで生まれた「ものづくりは人づくり、人づくりは心づくり」という言葉は、ものづくりの世界に限らず、我々日本人が旧来から受け継いできた「受け入れる心」を上手く言い当てているのかもしれない。

ものづくりの原点は、ものづくりに喜びを感じ、ものづくりをとおして進化し続けていく人間にこそある。夢をもち、決して諦めず、物事を達成する喜びを感じる人材を育てることで、これまで受け継がれてきた歴史を未来に繋げていきたいものである。



理科室の
掲示板

物理学の最先端は、子供の発想から！

科学情報部 主任研究主事 寺崎 清光

最先端物理学の主役の一つである素粒子。素粒子の構造を調べる方法をご存じでしょうか。まさか機械を分解するようにドライバー、ペンチを使うわけにはいきません。細胞だったら顕微鏡で見ることができます。極細のメスも開発されているので切り刻んで分解することもできます。分子だったら化学反応が使えます。しかし、原子より先になると、何か道具を使って



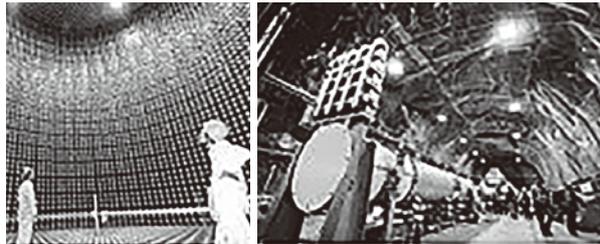
KEKの加速器全体写真



加速誘導路

分解することができません。そこでどうするかというと、なんと驚きの子供じみた発想です。取り出したしたいものを含んだ物質（例えば「素粒子」を取り出したかったら一つ上の階層の「陽子」）を思いっきり固い壁にぶつけて壊すのです。その碎けた破片の中から素粒子を

拾うのです。ものすごく簡単なやり方なのです。それが物理学の最先端で行われている研究手法なのです。できるだけ細かく砕こうと思ったら、できるだけ勢いよくぶつけないといけません。その勢いをつける装置が加速器なのです。



スーパーカミオカンデ

重力波検出器

日本にはKEK、ヨーロッパにはCERN、アメリカにはFNAL等の研究機関があり、超高速での衝突が可能な加速器を使って、日々研究されています。

実は今、富山は加速器を使ったニュートリノ研究や新しい研究分野である重力波研究等、最先端物理学の前線基地として注目されている街なのです。「分からないところがおもしろい」。知的好奇心をくすぐる街の今後の発展を楽しみにしている今日この頃です。

※写真はKEK、 Super-Kamiokande、 KAGRAの各HPより

教育相談

連載

あなたの話を聴かせてください

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

近頃よく聞くカウンセリングマインド。私は、「あなたの話が聴きたい」「あなたの気持ちを知りたい」という心で相手に接することだと思っています。説教やアドバイスは、「私の話を聞きなさい」という態度になってしまいます。相手が元気なときは効果的かもしれませんが、悩みや苦しみを抱えている人の心には届きません。話を聞かされるばかりになってしまうと、心を開くことは難しくなってしまいます。

カウンセラーとして相手と接するとき大切にしていることがいくつかあります。まず、「簡単には理解しないこと」。話を少し聞いただけで、すべてを分かったつもりになるのは危険です。その話は、その人の価値観によるその人だけのもの。すべてを理解し、受け入れることは不可能であり、「あなたの世界に入ってもいいですか」という気持ちで恐る恐る相手に近付こうとします。

次に、「教えないこと」。言い換えると、「相手の力を信じること」です。助けたいという一心から、よかれと思うことを伝えたいことはあります。助言

を求められることもあります。それでも、「答えはその人の中にある」と考え、相手の思いを尊重します。

3つ目は、「相手のペースで話してもらうこと」。まくしたてる人、つぶやく人、時には泣き出す人もいますが、口調やしぐさに合わせてうなずいたり、相手の言葉を繰り返したりします。話す前より少しでも心が軽くなってもらうことが目標です。できるだけ穏やかな気持ちで、ゆったり話を聴こうと心がけています。

そうはいつても、カウンセラーも人間です。家に帰ると、思うに任せない夫や息子に怒りをぶつけてしまうこともあります。息子に「カウンセラーのくせに」となじられ、修行が足りないことを思い知らされます。未熟な自分を認めることも私にとっては大切なことです。「出会った人はみな先生」という気持ちを忘れず、人と真摯に向き合うことを通して自分と向き合っていきたいと思っています。

